

梶井基次郎「檸檬」の表現に関する一試論

—主人公の精神状態と檸檬の描写・作品構成の符合—

中重 芳美

はじめに

梶井基次郎の代表作「檸檬」は、檸檬が爆弾になって丸善が木端微塵になるという発想が描かれた、わずか10行ほどの最終部分がことさら強い印象を残す作品である。極言すれば、他の部分の詳細が翳み忘れ去られてしまうほど、この箇所はあまりに鮮やかで強烈だと言えよう。小林秀雄氏は檸檬が爆弾になり爆発する想像について以下のように述べる¹⁾。

「丸善の棚に黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た悪漢は私で、—（もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう）」と彼の叛逆は諧謔の裡に完成する。

主人公にとって丸善は気詰りな場所であり、そこに爆弾(檸檬)を仕掛けた私は悪漢で、大爆発を想像すると面白いと言う小林氏の見解は、確かに一面において説得力を持つようである。しかし敢えて問いたい。彼の発想は「叛逆」なのか、かつ「諧謔」なのか、と。

上文に続く小林氏の見解を先に見ておこう。

これは言ふまでもなく近代知識人の

頹廢、或いは衰弱の表現であるが、（尤も今日頹廢或いは衰弱の苦い味をなめた事もない似而非知的作家の充満を、私は一層頹廢或いは衰弱的現象であると考へてゐる）この小話の味ひには何等頹廢衰弱を思はせるものがない。切迫した心情が童話の様な生々とした風味をたゞへてゐる。頹廢に通有する誇示もない。衰弱の墮り易い虚飾もない。飽くまでも自然であり平常である。

こうして読み続けると、小林氏は、檸檬の描写変遷に連動する主人公の精神状態を置き去りにしているのではないか、それ故に最終盤の場面を独立させて見ているのではないかという懸念を抱いてしまう。実のところ、檸檬が爆弾になり爆発するというのは、“直接的な感覚”によって“現実の檸檬”を段階的に描写する本作品の中で、かなり飛躍した発想・表現である。この急速に飛躍した発想が、「叛逆」、「諧謔」、「近代知識人の頹廢、或いは衰弱の表現」と見做されたのであろうか。しかしながら、本作品の流れを主人公の気持ちのままに読み進め、当該箇所にたどり着く時、極めてシンプルな主人公の精神図が見えてくる。すなわち、一気に飛躍するこの発想は、“病み”の躁状態がピークをむかえたことを示すに他

ならないのである。とは言え、飛躍が唐突におとずれたわけではない。作品上に檸檬が登場してからの主人公の気持ちの変遷を明らかにすることによってこの点は明白になる。そこで、檸檬の登場の箇所からその変遷を確認してみよう。

なお、本稿における作品の引用は以下のテキストによる。『檸檬』梶井基次郎、新潮社(新潮文庫)、平成16年、8-16頁²⁾。

檸檬の描写と心理的昂ぶりとの符合

本作品において檸檬が登場するのは、以下の箇所からである。

その日私は何時になくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。

ここからの主人公の行動は時系列で極めて掴み易くなり、かつ、檸檬の描写と精神状態との変遷がクリアに符合する。さしあたり、当箇所から終わりまでの流れを要約してみたい。

檸檬を目にした→買った→気分がよくなった→その頃入店が気重であった丸善に楽に入った→再び憂鬱な感覚におそわれた→本の上に檸檬を置いた→眺めた→そのままにして丸善を出店した→くすぐったい気持ちになった→想像の中で檸檬は爆弾に転化した→これが大爆発をしたら面白いだろうなと思った→この想像で頭の中は充たされた→おわり。

実に明快であり、あっけないほどストンと終わる。この終わり方もまた主人公

の心持ちから説明が可能であるが、その前に、この要約から見えてくる3つのキー・ポイント、檸檬(1点目)、精神状態(2点目)、丸善(3点目)の1点目と2点目との関連にまず注目し、檸檬の描写と主人公がそれをどのように捉えたかについて時系列でまとめ、前節で述べた作品最終盤における表現の飛躍を明らかにしてみよう。

1. 「レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単なる色も、それからあの丈の詰った紡錘形の恰好も」……………【視覚】
2. 「その檸檬の冷たさはたえようもなくよかった」……………【触覚】
3. 「その果実を鼻に持って行っては嗅いでみた。…(中略)…私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇って来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだった」……………【嗅覚】
4. 「その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので」……………【重量感】
5. 「その檸檬の色彩は…(中略)…カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした」……………【空気感】
6. 「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」……………【飛躍・飛翔感】(心象)

上記1から4までは、檸檬が色彩や形状およびその重さ等の“直接的な”感覚で捉えられている。この点に関して、近藤一郎氏は次のように述べる³⁾(下線は筆者による、なお、本稿の引用部分の下線はすべて同様である)。

そのレモンを凡る角度から、その単純な冷覚や触覚や、また嗅覚、視覚について、作者の持つてゐる詩人的な繊細感覚で書いてゐるのだ。手法は確実だ。而し憂鬱の内容が、読者に背を向けてゐるので、或ひは没落に瀕したインテリの悲哀だと頭からやられないとも限らないスキが発見できる。

上記下線部の表現は、本文(「実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が」)に準じたものであろう。しかし、本作品の檸檬の感覚表現をこうして一括してしまうと本作品の核心が曖昧になる。そこで、本稿においてまとめた時系列の流れに沿いつつ見直してみよう。すると、檸檬の感覚表現の変遷からは、近藤氏の述べる「憂鬱の内容」とは逆の顔、躁鬱の躁状態が高じる過程が赤裸々に読み取れるのである。例えて言えば、まるで恋をした者が愛しい相手をおずおずと確かめてゆくときの熱っぽい興奮が伝わるようだとさえ言える。つまり、眺めて確かめて、触れた感覚に喜び、匂いに血が滾り、抱えた重さで幸せが満たされる。これが、主人公と檸檬との距離感であり、その重さに覚えた幸福感が「思いあがった諧謔心」と表現されるのも、ふわふわと浮き足だったような心持ちの素直な表現と言える。

ところで、上記5と6との檸檬の表現は「直接的な感覚」表現ではない。言ってみれば、5は五感とは異なる人間の受容器が受けとめる感じ方であり、6は感覚刺激そのものではなく“心象(イメージ)”である。ここに、前述した“現実の

檸檬”の感覚表現からの明らかな飛躍がある。ところで、飛躍とはいえ、5の空気感もまた人々に備わる感覚の1つであり、1～4の視覚、触覚、嗅覚、重量感とともに、大きな括りでの感覚の範疇に収めることが可能であろう。従って、4から5への檸檬の捉え方は、“感覚的な飛躍”とまとめられよう。しかし、檸檬を爆弾に転化させる発想は、極めて飛躍した“心象”であり、かつ、この“心象”部分には説明的な表現が何ひとつないのである。それは、下記の引用部分に引き続き出てくる。

埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

この直後、最も印象に残る最終盤の全10行に突入する。ここからの表現は、わずかばかりも説明的な修飾・接続語がない。まるで、箇条書きのように簡潔かつ加速度的であり、ここにはすでに諧謔心などなく、主人公のざわざわと切迫したような心持ちだけが強烈に伝わってくる。そして、何よりも主人公が病んでいたことを忘れてはならない。「肺炎カタル」、「神経衰弱」、「背を焼くような借金」、これらが主因ではないと言うものの、やはり複合的に主人公の病みを形成していたことは間違いない。そんな主人公の躁の高みは、爽快・晴れやか・明暗の明になど決して等値され得ない危うい“病み”の昂ぶりの頂点なのだ。このような頂点の次に何が来るであろうか。きっと何も無いに違いない。あるのは、呆けた状態、

つまり心の真空だけなのではないだろうか。この状態こそがあっけないほどストンと作品の終了する要因であり、それほどに躁の頂点は高かったと言えよう。

ところで、キー・ポイントの3点目に挙げた「丸善」は、檸檬にたいする、このような感覚における強烈な飛躍を作品全体の中に収め昇華させるための重要な役割を担うのであるが、この点に関しては、本作品の構成を整理した後に検討することにした。

「檸檬」の中の2つの作品

周知の如く、「檸檬」には、その原型と言われる「秘やかな楽しみ」という一篇の詩⁴⁾がある（ここでは、詩草稿を原文どおりに記載しており、[]、『 』はそこに記されたものである。また、原文は分かち書きされている）。

一顆の檸檬を買ひ来て、そを遊ぶ男あり、電車の中にはマントの上に、道行く時は手拭の間に、そを見 そを嗅げば、嬉しさ心に充つ、悲しくも友に離りて ひとり 唯独り 我が立つは 丸善の洋書棚の前、セザンヌはなく、レンブラントはもち去られ、マチス 心をよるこぼさず。独り 唯ひとり、心に浮ぶ楽しみ、秘やかに レモンを探り、色のよ[ろし]き 本[の]を積み重ね、その上に レモンをのせて見る、ひとり唯ひとり数歩[を]へだたり それを眺む、美しきかな、丸善のほこりの中に、一顆のレモン澄みわたる、ほゝえまひて またそれを とる、冷さは熱ある手に快く

その匂ひはやめる胸にしみ入る、奇しきことぞ 丸善の棚に澄むはレモン、企らみてその前を去り [ほゝえみて] 『 』去る、]

ほゝえみて それを見ず、

一読してわかるように、この詩は小説の後半部分を構成する。そして、この詩が単に「檸檬」の原型であるという以上に小説の中核がこれに凝縮されている。ここで注目されるのは題名である。本来、詩は言葉を厳選し行間に多くの情景や思いを潜ませる。それだけに、題名は作品を統括し最も言いたいことのエッセンスが選び抜かれた言葉で記される。とすれば、この詩の「秘やかな楽しみ」という題名には閉じ込められた高揚感が示されていると考えることができる。このイメージに小説を貫く主人公の“病み”が重なりあうことによって、「檸檬」は最終盤の躁状態の高みを形成するのである。

ところで、このように強調すると、あたかも檸檬の登場以前が単なる添えものであるかのように思われるかもしれない。しかし、それは間違いである。上述した通り、作品を貫く主人公の“病み”が全体の構成上不可欠なのである。ただし、檸檬の有無だけではなく、表現上の特徴の違いによっても、二作品と言えるほど明確に本作品は二分されるのだ。以下の引用部分が、前・後半を大別する箇所と見做せよう。

また近所にある鑑屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だった。（前半

部分の終了箇所)

その日私は何時になくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。(後半部分の開始箇所)

上記の引用箇所は、下線部の「その店」という指示表現を介して巧みに前文と連結し、読者によどみなく読ませる。ところが、表現上の相違はこの前後において極めて明快なのだ。特に前半部は特異な特徴を示す。

前半部の表現上の特徴

前半部の表現上の特徴は、矛盾する2つの性格の内容が自然に併存していることである。具体的には、1字下げによって区分される9つの段落内容が極めて独立的事であること、にもかかわらず、読後感に一定のまとまりを感じさせることである。個々に考察してみよう。

- ・ 汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。
- ・ 私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。
- ・ 私はまたあの花火という奴が好きになった。
- ・ びいどろという色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。
- ・ その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。

数箇所を挙げただけであるが、その他も含め記述は、「好き」のみではなく「楽しんだ」、「ひきつけられた」、「私を慰める」等々の表現を用いて列挙される。言うなれば、散発的事象の寄り合わせ描出である。さらに、大局的に論理的筋立てを成しているとは言えず、分量に比して決して読み易くはない。その最大の要因は、鬱ゆえに一貫した文脈を継続させるだけの気力に欠けている点にある。従って、文脈は段落ごとに内容が切れ切れとして、読み進める際に、ある種の躓くような感覚とノロノロと速度のあがらない掴みどころのない印象を齎す。後半部が、檸檬を介して主人公の精神的昂ぶりを表出させ、その表現も簡潔かつ加速度的で一転して読みやすくなるのと極めて対照的な特徴である。

以上のように、前半部が点々と独立的な諸段落であるにもかかわらず、なぜ読後感として一定のまとまりを感じさせるのか。これを可能にするのが、第1段落と第2段落とのそれぞれ冒頭の表現にある。

第1段落は、作品の冒頭ならではの表現ポイントを有す。それは、あたかも前半部に一定の筋立てがあるかのように錯覚させる効果をもつのである。まず本文を読んでみよう。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいてと宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果

した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。……中略…… 何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

この「不吉な塊」の正体は何であろうか。素直に読む限り、ある種の「焦燥もしくは嫌悪」であるようだ。さらに、それは「宿醉に相当した時期」がやって来たことで悪化したようである。ところで、「えたいの知れない」と記されるものの、「えたい」の正体・要因は複合的に存在するに違いない。すでに述べたように、「肺尖カタル」も「神経衰弱」も「背を焼くような借金」もすべて「えたい」の正体・要因の一部を占めていると見做すのが妥当であり、敢えて言い切れば、「えたいの知れない不吉な塊」という表現は、極めてありのままに自身の状況を記述したのであって、活力もなく落ち着きのない不安定な精神状態に陥っていたことを述べているに過ぎないのだ。しかし、はからずも作品冒頭のこの1文が、前半の散発的事象の描出をあたかも脈絡のあるが如く錯覚させる効果を担うことになる。すなわち、各段落の内容は、居堪れない憂鬱な苛立ちから浮浪する一場面一場面として一定の筋立てであるかのような先入観を結果的に可能にするのだ。

続く第2段落はこう始まる。

何故だかその頃私は見すばらしくて
美しいものに強くひきつけられたの
を覚えている。

下線部に注視しよう。厳密に言えば、「見すばらしい」と「美しい」とは相反(矛盾)する表現とは言えない。しかし、下線部の表現は修辞技法の1つである撞着語法⁵⁾と見做せよう。撞着語法とは、矛盾語法とも呼ばれるように本来相反する語を並列して用いることによって、わけはわからないものの奇妙に魅力的でかつ強い印象を与える修辞技法である。「見すばらしくて美しいもの」という撞着語法で第2段落が始まることによって、第1段落における先入観のインプットと同様の効果を生じさせるのだ。第2段落の上記引用の先を読んでみよう。

風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくらしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と云ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり―

確かにこれら列举された好みが「見すばらしく」見えることには納得できる。しかし、これらは「美しい」のだろうか。美醜が主観に支配されるとはいえ、好きであることを美しいと等値するのはいささか無理がある。とは言え、当段落における「美しい」の意味内容は、かなり広範で極めて個人的な感覚によるものであると捉えればよいのであって、重要なのは、「見すばらしくて美しい」という表現である。

ここで、撞着語法を用いた表現上の効果を強調しておきたい。例えば、“冷たい優しさ”、“醜悪な美貌”、“凍った炎”などが当該語法の例であるが、力点は優しさ、美貌、炎という後者にあることに気付かれるであろう。これに矛盾する語彙が結合するとその表現は、限定的な意味合いから途端に解き放たれ魅惑的な感覚世界へと拡がる。「見すばらしくて美しい」も同様である。表現の意味は曖昧であっても、読者の感覚に不思議な魅力を放って拡散する。従って、これ以降続く独立的で点点とした好みらしきものの散発的描出が、何かしら不思議で意味のある「美しい」ものの列挙として、一定の繋がりを持つかのような表現効果を発揮するのだ。

このように、「えたいの知れない不吉な塊」、「見すばらしくて美しい」という二つの表現によって、前半部の独立的内容の各段落は一定のまとまりを獲得する。ただし、これらに作者の作為・意図は感じられない。むしろ、作者の憂鬱な状態が選ぶべくして選んだありのままの表現に思われる。そして、こうした精神状態を根底とする散発的描出が本作品の前半部分を占めることによって、檸檬の登場はその後のドラスティックな展開を際立たせると言えよう。

ところで、前半部の特徴としてもう1点考察しなければならないのが、「丸善」である。作品において重要な役割を担うと述べた「丸善」は、前半部ではこのように記述される。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであつた所は、例えば丸善で

あつた。……中略……然し此処ももうその頃の私にとっては重くるしい場所にすぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった。

下線部で明らかなように、“好き”だったけれど“嫌”になったと記されるのは、“好きなもの”が散発的に描出される前半部において、唯一丸善のみに限られる。この点もふくめ、次節において丸善の作品上の重要な役割について論を進めたい。

丸善の役割

言うまでもなく、先行研究は「丸善」に関してさまざまに言及している。ただし、それらは、おおむね何かしらの象徴として「丸善」を捉えているように思われる。例えば、「美の具現した世界」⁶⁾、「生の不安を一層与えるしかない」⁷⁾ 場所、そして、本稿の冒頭に引用した小林氏は、檸檬が丸善を破壊する空想を「彼の叛逆」と言い、あたかも丸善が破壊に値する強大な権威の象徴であるかの如く捉えているように読める。はたして、丸善はこう捉えられるような場所なのだろうか。

主人公が「その店」で目にしてからその重さに感嘆するに至る檸檬は、「何がさて私は幸福だったのだ」とまで言わしめる。それにもかかわらず、「平常あんなに避けていた丸善」に「ずかずか入って行った」主人公からは急速に幸福な感情が逃げ去り、またしても憂鬱の中に落ち込み、彼の行動は、再びノロノロ・もったりとした表現で叙述される。では、何故「平常あんなに避けていた」丸善に敢え

て入ったのだろうか。また、何故「易やすと入れるように」思え、「ずかずか」と入って行けたのだろうか、と素朴な疑問がわく。その答えの1つは、言うまでもなく檸檬の存在であろう。主人公の精神状態は段階的に高揚しており、ついには、檸檬の重さに「思いあがった諧謔心」さえ抱く主人公の精神状態は、ふわふわと浮ついた興奮に包まれているのだ。それ故に、檸檬を持ってさえいれば怖いものなどないと思ったに違いない。「易やすと入れるように」思えた理由はこれで確認できる。

では何故、敢えて気重な丸善に入ったのだろうか。この答えは、作品前半部の“好んだもの”の列挙中、好きだったものが“嫌”になるという表現が唯一「丸善」に限られるところにある。つまり、俗っぽく言えば、主人公にとって丸善には、“未練”があるのだ。だからこそ、好きだった頃の感覚を求めたのであろう。従って、丸善へ入るのは偶然ではなく必然であり、同時に、前半部と後半部とを乖離させることなく1本の作品にまとめるうえで不可欠の役割を丸善が担っているのだ。

果物屋か八百屋か

さて、考察の最後に1点確認しておかなければならない点がある。以下を読んでもみよう。

その果物屋⁽¹⁾は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。其処は決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。……中略…… あんな色

彩やあんなヴォリュームに凝り固まったという風に果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれている。——実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。……略……。

その日私は何時になくその店⁽²⁾で買物をした。というのはその店⁽³⁾には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬など極くありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋⁽⁴⁾に過ぎなかったので、それまであまり見かけたことはなかった。

下線部(1)、(2)、(3)、(4)は、文脈上同一の店で間違いない。しかし、「果物屋」(1)と明記される「その店」(2)(3)が「ただあたりまえの八百屋」(4)というのは、仮に、青果店を言い換えたにすぎないと見做してもなお、かなり印象が乖離すると言わざるをえない。では、齟齬を問うべきなのだろうか。この点について、加藤典洋氏はこう述べる⁸⁾。

それは「果物屋」であっても「八百屋」であってもならない。果物屋であり八百屋でなければならない。またその平台はやはり「古びた」しかし「美しいもの」で、その上に置かれる果物・青物は「何か華やかな美しい」そして「音楽」につながるものを髣髴とさせなければならないのである。

まず、加藤氏は齟齬をあげつらっていない。この点は筆者も全く同感である。

しかし、「その店」に「美しさ」を求める氏の見解に対して筆者の見解は少々異なる。むしろ、「見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋」という表現に「華やかさ」が感じられない点に重要な効果が隠されていると思うのである。

下線部(1)「果物屋」に例え檸檬があったとしても、豊かな色彩を溢れさせる「果物屋固有の美しさ」の一隅では、これをことさら目立たせるのは困難であろう。ところが、「見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎない」店で檸檬を目にしたとすれば、どうであろうか。実際、かなり際立って見えるに違いない。表現上、檸檬にスポット・ライトをあてるには後者が極めて効果的なもの言うまでもない。

従って、一見齟齬を問いたくなる「その店」の表現は、指示表現によって中和的に媒介されることにより、前半においてはエッセー的であるのに対して、後半においては小説としてのドラマ性が高められたと推論できるのではないだろうか。

おわりに

さて、本稿では躁と鬱とをかなり執拗に強調してきた。本作品の読みは、主人公の精神状態の危うい性格を作品の全体構成において剔抉することで果たされるといっても過言ではない。本稿の結論は至極単純である。小説「檸檬」は、主人公の鬱が躁状態に転じる強烈な体験を描いた作品なのだ。

すなわち、主人公の精神に巣くう重くらしい「えたいの知れない不吉な塊」は、檸檬を手にしたことで一転して躁状態に

入り、檸檬が「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」へと転化した後、大爆発を思い描く瞬間にはじけ散る。「檸檬」は、鬱症状から駆け上がる熱を帯びたこの躁の感覚を表現したものに他ならない。作者は、「丸善」を名脇役に匹敵する舞台設定として設え、病的な鬱を土台とする前半と躁に駆り立てられる後半との分離を回避し、檸檬の表現上の昇華を鮮やかに描ききったのである。

従って、伊藤整氏は「小説としての構成、配列は下手だ」と述べる⁹⁾が、本稿の結論においてはその構成、配列はむしろ見事と言いたい。そして、彼の病みは、本稿で明示したいいくつかの表現効果によって、ありのまま外へ外へと読者に向かって発露したと考える。だからこそ、本作品の読後感には、作者が病みのままにその触手でしっかりと掴んだ“黄色い檸檬”、“丸善”、“爆弾”が三題断のようにことさら強く印象に残るのであろう。

短編小説でありながら、ともすれば、“檸檬が爆弾に転化し、丸善の棚で爆発するという発想”、この強烈な印象だけを読者に残し、その作品(全体)理解には、しばしば曖昧さをぬぐいきれない「檸檬」に関して、本稿では、檸檬の諸感覚からの描写、丸善の意味、果物屋・八百屋の表記のゆれ、および作品構成を、主人公の精神状態とともに考察することによって、上述した一定の結論提示を行えたと考える。

読者をひきつける文学作品は総じて、個々の諸設定・道具立てを支え際立たせる作品を貫く芯があるに違いない。そして、それらは、作品表現を通じて一体化し、一作品として読者にさしだされるの

であろう。

本作品の場合、主人公の精神状態がその芯だったと言える。そして、作品の構成、丸善の役割等すべてが、この精神状態の変遷にぴったりと符合し、「檸檬」の鮮明な全体像を明らかにするのであった。

梶井基次郎「檸檬」という一作品において表現の考察に集中した本稿は、その表現から作品を読み解こうとするささやかな一試論にすぎない。

<注>

- 1) 小林秀雄「文芸時評―梶井基次郎と嘉村磯多」(鈴木貞美編『梶井基次郎『檸檬』作品論集』クレス出版、2002年、6-7頁)
- 2) 以下の全集との異同を確認したうえで、読みやすさを考慮し「新字新仮名」に改められた新潮文庫を使用した。梶井基次郎『梶井基次郎全集 第一巻』筑摩書房、1999年、7-13頁
- 3) 近藤一郎「梶井君の檸檬」(鈴木貞美編『梶井基次郎全集 別巻』筑摩書房、2000年、273頁)
- 4) 梶井基次郎 前掲書、336-337頁。なお、本論ではふれていないものの、当該引用が草稿であるがゆえの注目点を付記しておきたい。それは、次の箇所である。「企らみてその前を去り[ほゝえみて『』去る、]」作者は、「企らみてその前を去り」と「ほゝえみて『』去る」との選択を、この段階では迷っているのである(最終的には「企みて」が選択される)。この点からも、小説の最終盤における主人公の心情の一端をうかがい知ることができると言えるのでは

ないだろうか。

- 5) 撞着語法 = Oxymoron. Edward P. J. Corbett, *CLASSICAL RHETORIC for the Modern Student*, New York, 1971, pp.491-493. なお、撞着語法の表現効果については以下の文献に従う。柳澤浩哉「李徴の詩に『欠けるところ』とは何だったのか?」(柳澤浩哉・中村敦雄・西香秀信『レトリック探究法』朝倉書店、2005年、114-116頁)
- 6) 濱川勝彦「檸檬」(前掲『梶井基次郎『檸檬』作品論集』、164頁)
- 7) 内田照子「檸檬」(同上書、300頁)
- 8) 加藤典洋「梶井基次郎―玩物喪志の道」(同上書、215頁)
- 9) 伊藤整「檸檬」(前掲『梶井基次郎全集 別巻』、274頁)

<付記>

本稿の執筆に際しては柳澤浩哉先生に、そして、投稿後は査読委員の先生方および代表理事の半澤幹一先生より、鋭いご指摘・熱いご指導を頂いた。深くお礼を申し上げたい。

(広島大学大学院生)